寄託文書紹介5

石原好子家文書

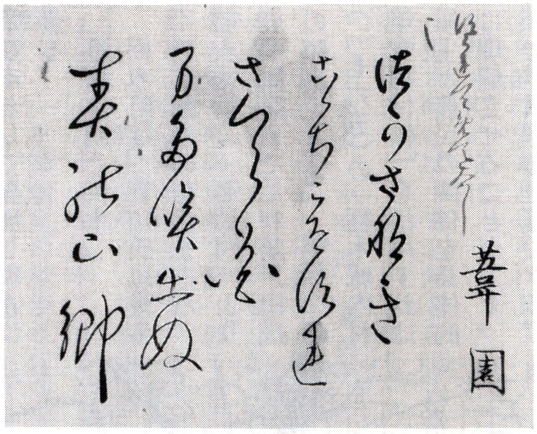
栃木の狂歌師として有名な通用亭徳成の米寿の賀に、「枝たるゝ峰の老松さかさまに手をとりてや千代ハへぬらん」と歌った狂歌師がいます。芦中子正照です。この狂歌会の撰者は、通用亭徳成とその子の通環亭真袖、そして『押原推移録』の著者として知られる浅桑園安良(山口安良)の三人でした。

浅桑園は、鹿沼の連を代表する狂歌師ですが、ともに活躍した撰者に葦園正名がいます。買山翁や大観堂などの別号も使いましたが、通称は弥五八(福田姓)といい、日光領上草久村(鹿沼市)の名主でした。実は、その子状助が芦中子正照で、福田家は親子二代にわたり著名な狂歌師を輩出したことになります。

縁あって、福田家の古文書・記録類は、石原好子氏所蔵となり現在は文書館の寄託文書となっています。この中に鹿沼・栃木・日光の狂歌師との交流を伝える書簡をはじめ、狂歌番付・会のちらしなど、正名・正照に関連する文書が含まれているのです。近世下野の狂歌史あるいは郷土の文化を考える上で貴重なものといえます。

◀歌会ちらしの版木

正名の狂歌に、「すなほなる麻つくるにはみだれ苧のみだるゝ迄に心つくしつ」というものがありますが、麻の特産地鹿沼ならではの歌といえます。そして、鹿沼の特産といえば忘れてならないのが朝鮮種人参です。朝鮮人参の種を国内に蒔き付け栽培するもので、鹿沼地区は日光と並ぶ一大生産地でした。人参の耕作者は御用参作人と呼ばれ、幕府の統制下にありましたが、人参栽培に関する直接の世話役となったのが参作世話人でした。当家の文書には、この朝鮮種人参関係の文書があり、しかも「参作世話人 理左衛門」と書かれたものが散見されます。理左衛門は、福田家の当主の通称ですから、福田家は上草久村の御用参作人を束ね、大きな収益を得たものと思われます。二人の狂歌師を育んだ背景の一つがこの収益であったといえます。



◀戊午発会の正名の歌

◀人参買上数表示の木札

その他、狂歌・人参関係以外では牛頭天王・小川大明神・都賀大明神三社の神道祭式裁許状なども、当家の近世の文書を特徴づけるものです。

次に、近代の文書を見ますと、大部分が正照の子、弥五八関係のものです。弥五八は、一八七二年(明治五年)、上草久村と下草久村の戸長になると、以後大小区制・三新法の時期に引き続き戸長を勤めました。この間、布教周旋・教導職試補・神風講社世話掛・勧業委員・学務委員などにも任じられています。そして、一八八九年(明治二二年)、町村制が施行されると西大芦村の初代村長となり、さらには第四代の村長にも再任されました。従って、当家の文書には、明治期の新政府の地方支配や草久村付近の村政の様子を伝える多くの史料が含まれています。

(竹末広美)